

始



特 249 248

492 844

小笠原長生述

三傳人
を
詔
す

大阪時事新報社編

32

特249
492



三 偉 人

軍將木乃(左上)・帥元郷東(右上)
翁剛重浦杉(下)



小笠原子爵とその書

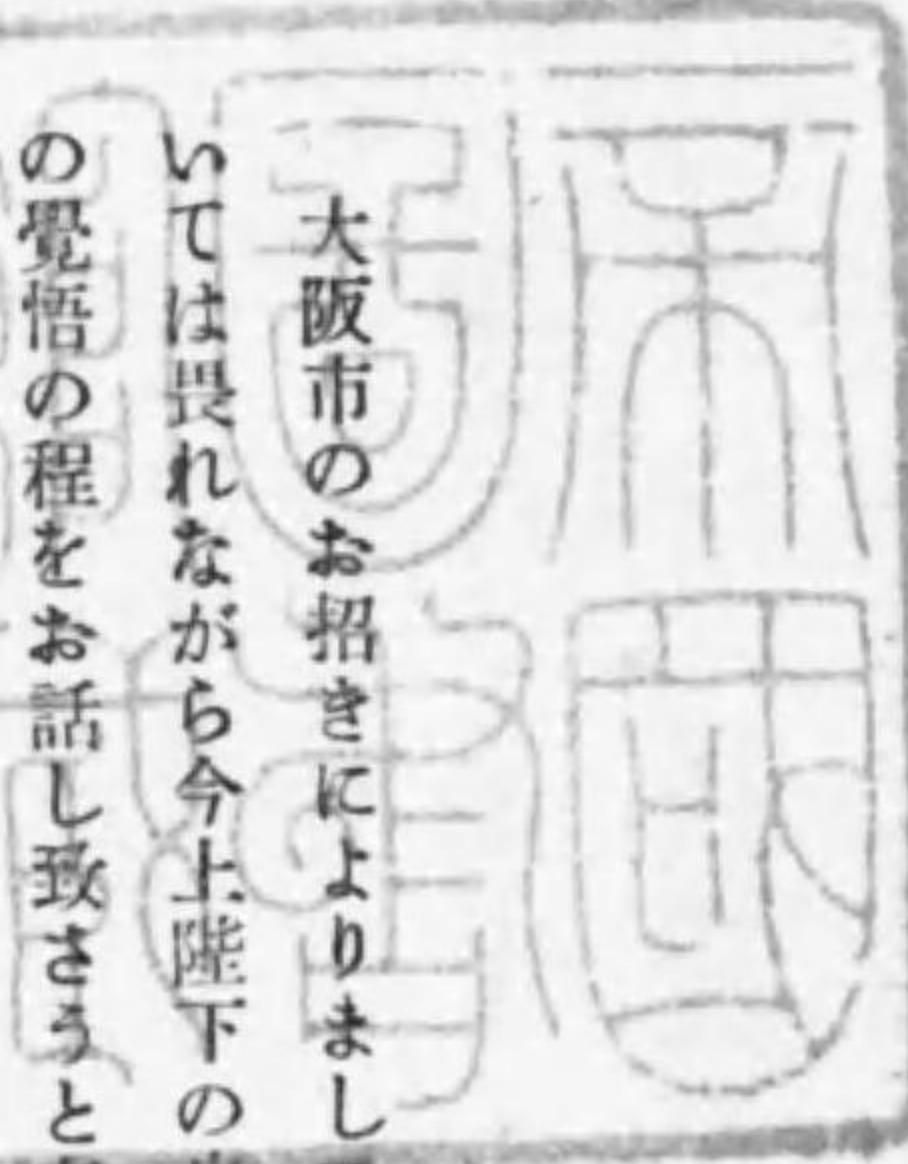
凌雲集

小笠原子爵
著

三偉人を語る

宮中顧問官
海軍中將子爵

小笠原長生閣下述



大阪市のお招きによりまして本日この尊いお建物の中で明治天皇様に關し奉ること、また延いては畏れながら今上陛下の皇太子殿下でおはし、頃の御教育に關し奉仕せる人々について其の覺悟の程をお話し致さうと存じます。

「國歩艱難にして偉人を懷ふ」といふことがあります、誠に國民の氣持はさうあるべきだと思ふのでございます。「三偉人」と掲げましたが、それは乃木大將と東郷元帥と、それから杉浦重剛先生、この三人を指して三偉人と申したのであります、私は人間冥利と申しませうか、或はもう少し細かくいつて武人冥利と申しませうか、この三人の偉人のお方にはいろ／＼



御指導も受け、また親しく接することを得たのであり、さうして今日この頃の世相に對して益々この三偉人を偲ぶのであります。しかしこの三偉人が畏れながら、今上陛下の御教育に關し奉仕せる當時の赤誠についての講演は、これまであまりいたしたことはないのであります。實は東郷元帥が一昨年薨去されました際に、宮内省の官吏の方々からの御依頼がありました、前後三回宮内省に参りまして、今上陛下の皇太子殿下であらせられる際の御教育に従事し奉れる人々について講演致したことがあります、その他にはこれまで殆どお話ししたことはないのであります。従つて不行届の點も御座いませうが、どうかその邊はよくお含み下さいまして、講話よりも私の精神をお汲み取り下さいませうやう豫め御諒承願ひたいと思ひます。

因縁深き兩將軍の生ひ立ち

先づもつて東郷元帥と乃木將軍とが、東宮殿下の御教育に關してどういふ關係にあつたかといふことを申し上げたいと思ひます。誠に不思議なことにはこの兩將軍には家系を始め色々な因縁が纏つてゐるから先づ其の事から申します。

今日は恰度釋尊の降誕會に當りますが、佛教七千卷、即ち一切經七千卷も詮じ詰めるとこの因縁と佛性との關係を説いたに過ぎないとも云ひ得る、因縁といふことは佛教ではそれほど重大視されてゐるがこの東郷・乃木兩將軍の間には此の因縁が深いといふのは不思議な位であります。先づ第一に兩將軍の血統から云ふと一族の關係にあります。と申しますのは東郷元帥の遠祖といふのは澁谷庄司重國といふ人で、この人は御承知の通り鎌倉時代に幕府に仕へ名將の譽れ高かつた人ではありますが、その重國の娘が恰度乃木將軍の祖先に當る佐々木高綱の繼母となつてゐる。さうして更に復その繼母の生んだ高綱の異母弟の娘と、高綱の子息とが結婚してゐる。斯様にして澁谷家、佐々木家は親戚關係をなしてをります。さうしてその澁谷の子孫が東郷元帥、その佐々木の子孫が乃木大將となつてをるのでありますから、つまり兩將軍は一族の關係にあるのであります。

それからまた海の東郷、陸の乃木と、即ち明治三十七、八年戰役を媒介として世界的にこの二人の偉人は讃へられてをりますが、其の出身の経路が亦似通つてをる。御維新前各藩中で最も陸軍の整備してをつたのは長州藩でありましたが、乃木將軍は其の藩士であつて、藩の陸軍

に出仕したのが十八歳の時であります。それから東郷元帥は、これも當時最も優れた海軍を持つてをつた薩摩藩士で、さうして藩の海軍に出仕したのが二十歳の時であります。両將軍は二歳ちがひで東郷元帥が上であり、さうしてどちらも慶應二年に出仕してゐる、即ち慶應二年に東郷元帥は薩摩の海軍に身を投じ、乃木將軍は長州の陸軍に身を投じてゐる。斯く同年に藩の陸海兩軍に出仕したと云ふのも、一つの因縁と申すことが出来ませう。

次ぎにはこの二將軍の性格等について申し上げます。昨今御當地でも櫻の花がチラホラ咲きかけてをりますが、櫻についての兩將軍の歌があります。この歌が最もよく兩將軍の性格を現してをるのでありまして、乃木將軍の櫻に對する歌は

色あせて梢に残るそれならで 散りて後なき花ぞ戀しき

如何にも乃木將軍の壯烈な性格がよく現れてをる、即ち色あせて梢に残るよりも潔く散るといふことが理想であつたことがよく判るのであります。それから東郷元帥の櫻に對する歌は

咲くもよし散るも吉野の山櫻 花の心は知る人ぞ知る

佛教に自然に一如するなどと申すことがありますが、浮世があゝだの、かうだのと拙らぬこと

にくよく／＼しないで、どこまでも大自然に一如して安心立命を得るといふところに東郷元帥の面目があり、如何にもこの歌にその氣持がよく現れてゐる。この二つの歌を並べて見ますと兩將軍の大體の性格といふものがよく現れてをるのであります。

世間ではよくかういふことをいふ。乃木將軍は修養の偉人であつて、東郷元帥は天性の偉人である、しかし實際はそんな區別はないと思ふ、幸ひにして私は兩將軍に親炙したのであります。よく些細に検討して参りますと、どちらも修養の偉人なのであります。また如何に生れながらの偉い人でも修養を怠つて偉くなつた人はありはしない、どんな人でも修養の結果により、その人の持つてをる玉が磨かれるのであります。その乃木將軍も東郷元帥も共に深く修養を積んだ人であります、こゝに教育家諸君の目をつけられる最も大切な點が存すると思ひます。それならどうして兩將軍に前述のやうな異つた觀察があるかと申しますと、即ち修養の結果乃木將軍は修養式偉人になつた、東郷元帥の方は修養の結果天性式偉人になつた、これが一寸見ると區別があるやうに思はれる點であります、しかしどちらもいはゆる退轉の覺悟………：どんなことがあつても退かないといふ覺悟のもとに修養を積まれた結果、あのやうな偉人に

なられたものと私は考へてをります。

十年役と兩聖將の因縁

次いで兩將軍に最も關係のあつたのは明治十年の戦争であります、十年の戦争即ち西南の役私が改めて此處で申上げるまでもなく、乃木將軍はあの役に軍旗を失つた、それがために將軍はその後薨去に至るまでの三十餘年間といふもの、常に死場所を求めてをられたのであります。即ちいつかは立派に死んで軍旗を失つたお詫びをしようといふことは醒めても念頭から去らなかつたのであります。實は薨去の際に私に遺書を送られたのであります、その中にもそのことが書いてありました、すなはち

今般御歸京御面晤を得候儀は眞に望外の幸に候然るに小生此度の所決は西南戦以來の心事に候得共斯く畏くも御跡を追ひ奉り候様の場合可有之とは豫想も不仕恐入候儀に御座候云々

と遺されてをるのであります。これをもつてしても常に十年の役に軍旗を失はれたといふ一事

が將軍の一生を通じて其の運命を支配してをったのであります。これは改めて申さずとも世間周知の事柄であります。

ところが東郷元帥に取りましても生涯の運命に大關係を有してをるのが、矢張りこの十年の戦役でありました。それはどうかと申しますと、東郷元帥の生れたところは鹿兒島の鍛冶屋町であつた、さうして南洲西郷先生もそこに住つてをられたのである、さういふ關係からでもありませんが、東郷元帥は極く幼少の時分から西郷家に行つて隆盛の弟さんの吉次郎といふ人について學問や手習ひを修業してをった、従つて南洲先生もよく「平八どん平八どん」といつて可愛がられた、ところがその後東郷元帥は選抜されて英國へ留學してをる間に十年の戦役が起り、東郷家は一族を擧げて悉く南洲翁の幕下に投じたのであります。殊に東郷元帥の弟壯九郎といふ人は城山で戦死しますし、その他兄の四郎兵衛といふ人は負傷した、斯様に一家を擧げて西郷先生の麾下に従つたのであります。このことが英國へ傳へられた時、元帥と共に留學してをった同僚達が元帥のために非常に心配して「お前はこれから直ぐ日本へ歸つたらどうだ、さうして自分の考へる通りに自分の身を處したらよからう」と勧めた者もあつた。すると元帥

はそれを断つて「從來の關係上西郷先生にして起つたなら自分の一家が擧つてその麾下に投ずるだらうといふことは自分も豫期して居つたことである、しかしながら如何なる理由があるにしても西郷先生の麾下に投じて錦旗に双方向ひ奉るといふことは何としても恐懼に堪へぬ次第であるから、せめて自分だけでもこれからます／＼海軍の技術を習熟して將來大君の御爲め皇國のために大事が起つた場合には生命を捧げて御奉公申上げ一族の罪をお詫する覺悟であるから歸朝など思ひもよらぬと、堅い決心を示しました、即ちこれが東郷元帥の將來の運命を支配した一大原動力なのであります、日本海々戦においてのあの大勳功も此の覺悟が與つて力あつたといつてもいゝのであります。

かくの如く十年の戦役が東郷、乃木兩將軍の運命上に同様なる大きな關係を持つてをるといふことも亦一種の因縁であります。

高陞號撃沈と東郷の信念

それからその後兩將軍に關係を有したのは、明治二十七八年、いはゆる日清戦争の時であり

ます、畏いことではありますが明治大帝が東郷といふ名を確と御記憶遊ばされたのは、明治廿七八年戦役の當初に起れる高陞號撃沈からであると漏れ承つてをります。是等の事に關してはまだ東郷元帥が存命中に明治天皇御傳記編纂掛より元帥に出頭して詳細申述べて貰ひたいとの御交渉があつた、ところが元帥は「自分は甚だ口不調法であり、また自分のことを申述べることは恐懼に堪へないから代りに小笠原を差出しますからどうか小笠原からお聴取り下さい」といふので私が代つて出頭したのであります、この時にも『明治天皇様が東郷といふ名を深く御記憶に止められたのは二十七、八年の戦役の初めの高陞號の撃沈であります。』と申述べました、此の撃沈の報が傳はつた時の内地の騒ぎといふものは實に大變でありました。その時分は伊藤博文伯が總理大臣で、この英國汽船高陞號を浪速艦（當時東郷元帥は大佐で浪速の艦長をしてをつた）が撃沈したと聞くと、伊藤總理は、當時軍務局長をしてゐた、山本權兵衛大佐を呼んで「海軍はかういふ一大事を仕出かしてその責任を何とするか、イギリスを向ふへ廻すやうなことになるれば何とする」と非常に憤激され拳を固めてテーブルを叩いたので、テーブルの上にあつたコップが飛び上つて床に落ち微塵に碎けたといふ話がある、これは山本伯爵から私

が直接聴いたことでもあります。ところがだん／＼調べて見ると東郷浪速艦長のやつたことには少しもソツがなかつた、よく世間には若し禍ひを國家に及ぼすやうなことがあつたら東郷浪速艦長は切腹して申譯をする覺悟であつたといふ説が傳つてをりますが、それは大變な間違ひであります。縦へ東郷艦長が切腹したからといつて決してそれで事がすむわけのものではないので、若し英國と事を構へるやうなことにでもなれば、支那一國でさへ勝つか負けるかまだ判らなかつた際に、更に英國を向ふへ廻して戦はねばならぬやうなことになつたとしたら艦長の二人や三人が腹を切つても國家の重大事件の上には何の役にも立たないのであります、何事にも用意周到なる、東郷元帥は決してそんな無謀なことをする人ではない、縦から見ても、横から見ても、上から見ても、下から見ても、間違ひがないといふ確信を得て後、始めて「高陞號を撃沈すべし」と決斷せられたのであります。さればこの時伊藤總理大臣や西郷海軍大臣から詰責を受けても、平然自若として、東郷のした事に間違はこざらぬと斷言された。當時私は高千穂といふ軍艦に乗つてをりましたので、浪速へ行つて東郷艦長にお目にかゝつていろ／＼の意見を承つたのでありますが「誰が何といつても東郷のとつた處置に不都合はない」といはれた。

果せるかな一時間問題は非常にやかましくなつたが英國の國際公法學の大家連が東郷浪速艦長の採つた處置には一點の誤りもないと、辯論したので同國の輿論も鎮まり、反つて東郷艦長を英雄と稱へるに至つた、この時初めて明治大帝の御記憶に「東郷といふものは用ふべきものだ」といふ御思召がいでさせられたと拜聞致します。

外國人も泣いた乃木さんの心根

それから續いて明治二十七年九月十七日黄海大海戦が起つた、これは日露戦争の日本海々戦にも比すべきもので、此の一戦に勝利を得たのが戦争の大局に大影響を及ぼしてをります。この戦ひに於ても東郷浪速艦長は非常な働きをした、この話もしてをりますと長くなりますから略しますが、この黄海の戦勝に對し

ソノ威力既ニ敵海ヲ制壓スルヲ覺ユ

といふ勅語を聯合艦隊に賜つてをる、斯様に制海權を握り得たので我が第二軍は直ちに旅順に近き花園口に上陸するといふことになつたのであります。この時最初に花園口に上陸したのが

第一旅團長をしてゐられた乃木少將で、その乗船を護送した中の一隻が浪速なんだから面白いではありませんか、斯様に両將軍の一生にはいつも因縁が纏はつてをるから妙だ、そこで乃木將軍は浪速等の掩護の下にて無難に花園口に上陸して、蓋平、大平山、營口、田庄臺等の要害を攻め破り、夙く既に鬼將軍の名を轟かすに至りました。

日清戦役以後兩將軍は雁行して進級し、どちらも遂に大將になつたのでありますが、その後後に於て三十七、八年の日露戦役が起つた、ところで此の戦役に於て兩將軍が互に心血を瀝ぎ協力して奮戦したのが、難攻不落と世界の戦術家から保證せられた旅順の攻撃であります。

旅順の攻撃と言へば、今でも我々に困難の代名詞の如く印象づけられてをる程の悪戦苦闘を續けたものであります。御承知の通り乃木將軍の如きは最愛の二兒を君國に捧げ、それで戦死者の遺族に對する心の呵責を幾分慰めたと云ふ譬へやうも無い悲劇の主人公なのであります。

一人息子と泣いてはすまぬ二人亡くした方もあるといふ俚諺まで出來たといふのは何んたる悲壯なこととせう。尤も將軍は出征前既に死を決して夫人に向ひ、

勝典、保典の二人の子供の戦死の報があつてもまだ葬式は出すな、俺が死んでから三つの葬式を一緒にしろよ

と命じ、棺を三つ備へさせたとの噂さへ傳へられて居ります。それを聞いた外國人は、日本人とは自ら人情が違ふのであるから、前述のやうな忠誠心は解りさうもなく思はれますが、その外國人ですら乃木將軍のこの時の胸中には、皆泣いたと申すことであります。

聖將まことに聖將を知る

話を本に戻して、さて旅順總攻撃が始つたがなか／＼落ちない、新手を入れ替へ入れ替へして攻めるがどうしても落ちない、私は當時大本營の幕僚をしてお膝下にをりましたが、終には大本營の會議でも乃木將軍に對する非難の聲が出て來た。

何て戦さの仕方をするのだ、あれちやまるで戦さの仕方を知らないちやないかなどと憤慨する連中もありました、まして出征兵士の家族中には『自分の子供が撃たれ、兄弟が撃たれたのも皆乃木のやり方が悪いからだ』と怨むものもでき、赤坂の乃木邸……今では

東京の記念物の一つになつてをるこの乃木將軍邸へドン／＼石を投げ込んだり、悪口雜言をいつて前を通る者などがある、夫人はそれを聞くに堪へなくなつたもので、或る夜女中一人を連れてこつそり家を抜け出して伊勢の大神宮様へお参りをせられた事すらあつたのであります。かうなつて來ると我々も大本營の幕僚としていろ／＼議論を闘はせたものであります。そんな話を申し上げてゐると長くなりますから略しますが、兎に角乃木將軍に對する非難の聲は頗る猛烈になつて参りました、しかるにその中に於て敢然として徹頭徹尾大々の援助を與へたのは海の方面から陸軍に相應じて封鎖を續けてゐた東郷元帥であります。乃木大將はベストを盡してをる、彼なればこそあれ程我慢よくやり得られるので、彼は實にもう一生懸命にやつてをるではないか、だから海軍もこれをあくまでも助けねばならぬ、といふので先づ艦隊より大砲を乃木軍に貸してやつた、さうして旅順を攻めさせ、その上遂には内地からも大砲を取寄せて前後合して四十四門の大砲を第三軍に貸した、その撃つた弾の數は實に四萬五千五百餘發に上つてをる。

我々のやうなケチな料見の者から申しますと、實に馬鹿々々しいことだと當時考へました。

陸軍は陸軍でやればいゝ、我々は海軍のためにいろ／＼苦心慘憺してさうして作戰計畫を樹てゝをるのである、然るに無暗に陸軍のために大砲を貸してやるといふやうなことは不同意だ、などとかういふケチな考へを持つてをつた、ところが東郷元帥は全力を擧げて乃木將軍を助けた、さうして旅順が落ちた時に大本營に向つて打たれた電報にも

武勇絶倫なる攻圍軍の猛烈不撓の攻撃により旅順口の死命を制すべき二〇三高地が我軍の有に歸せしより云々

といふ書出して乃木將軍の働き振りを極力稱揚してゐる、これに徴するも東郷元帥が如何に乃木大將に對し同情が深かつたかゞ解ります。

前中上げたやうに世界的に難攻不落とまで謳はれた旅順が一年経たないうちに落ちたといふのはどういふわけか、これは申すまでもなく大元帥陛下の御稜威によること勿論であります。一面には乃木、東郷兩將軍が肝膽相照してびつたり心と心が合つてその間に紙一枚の隙もなかつたことが、この世界の要害たる旅順をして陥落せしめた大原因であります。

今日よく舉國一致といふ言葉を聞く、また億兆一心といふ言葉も聞く、しかしこれを極度に

實現し一致の力の如何に強いかを示して呉れたのが兩將軍の舉動でありまして正しく其の手本であります、でありますからいよく明治三十七年十二月下旬となり二百三高地が落ち、そこからドン／＼撃込んだ我が弾丸の爲めに、旅順港内にゐたロシアの軍艦はけふ一隻沈むあす二隻沈むといふ風にバタ／＼沈没し、僅にセバストポールと云ふ戦艦一隻が港外に錨所を移したが、これも連日連夜我が水雷艇が攻撃して遂に撃沈してしまひ、彼の艦隊は全滅に歸したのである、そこで十二月十九日東郷元帥は幕僚を引いて陸上に赴き乃木將軍に會つた、その時に秋山(眞之)といふ參謀が元帥と同行しましたが、この兩將軍の會見ほど印象を與へたものはないと私に後に話しました、それもその筈で乃木將軍にすれば二人の子供を失ひ何萬といふ兵士が討死してをり、また東郷元帥にすれば十餘隻の軍艦が沈んでをり、それに乘つてをつた人達も大部戦死してをります、斯様に悲壯の悪戦を續け遂に全勝を得た今、この兩將軍が手を握り合つた時の光景は考へただけでも涙なしにはをられないだらうと思ふ、かうして旅順が落ちた。

大帝に預け奉る將軍の生命

それから後御承知の通り年を越えて三十八年になり、陸で奉天の大會戦があり、海で日本海の大戦があつた。この奉天の大戦争には乃木將軍が第三軍を率いて参加し、日本海々戦には東郷元帥が總司令長官であつたことは改めて申上るまでもない。斯くして戦役も終り、東郷元帥は明治三十八年十月二十二日に凱旋され、乃木將軍は翌三十九年一月十四日に凱旋された、その凱旋將軍が陛下の御前にて戦況を奉告する際、私ども大本營の幕僚も御前に参列するのでありますから、兩將軍の凱旋のいづれにも参列したのであります、さうして乃木將軍が凱旋された際は更に忌憚なく苦戦の様相から自分の失策からすつかり報告し奉つた、その前に或る人はさうまで細かく失策まで申上げなくてもよいではないかと止めましたが、いやそれはいかぬ、あくまですべてのことを申上げなければならぬといつて盡く報告された。

さうして旅順の戦ひに幾度も幾度も攻撃したが功を奏し得ず、幾萬の將兵を亡くした事に及んだ時には、將軍の聲はふるへてをつたのであります、ところが表向きの凱旋式は終つて、その後何かの機会に特別拜謁があつた、當時明治大帝の御側に侍してゐたのは徳大寺侍從長、岡澤侍從武官長の二人だけであつた、その時に乃木將軍が、

これまで数十年の間一通りならぬ御聖恩に浴してをりまして、この度旅順の戦ひにおいて陛下の赤子を無数に殺しましたことは皆乃木の至らぬところであり、**てありますから萬死なほこの罪を償ふに足りませぬ、**

といふ意味を奏上して終に落涙し、そのまゝ悄然として御前を退出しやうと致しました、するとその様子を凝つとみそなはせられたる陛下におかせられては「乃木！乃木！」と御力強い玉音で御呼止めになりました。將軍はハツと驚きうや／＼しく立留まると、

「乃木！生は難く死は易いぞ、汝の胸中は察するが、朕に汝の生命を預けよ」

何とも申しやうのない御沙汰に、あまり勿體なくて將軍は感激の涙にくれてしまひましたと承ります。以上は後に岡澤武官長が謹話されたところださうで御座います。斯様の次第でありますから大帝崩御あらば乃木將軍といふ人はどうしても生きて居らぬ人で、御跡を追ひ奉つたのは當然さうあるべきだと私は思つてをります。乃木將軍の自刃されたことについては議論があり、是非についてもいろ／＼論ずる人がありますが、將軍としては當然と信じてをられたのであります。

朕に汝の生命を預けよ

と仰せられた、この陛下が崩御されたのでありますから、乃木將軍としてはどうしても生きては居りますまう。

大帝の思召して學習院長

明治大帝の御話が前に戻りますが、傳ふる所によりますと、乃木將軍が凱旋後山縣元帥は乃木將軍を參謀總長にと考へて、さうしてその趣きを明治大帝に奏上致しましたところ、御裁可がなかつた。そこで山縣元帥は恐懼に堪へず不明のお詫び申上げたところ、明治大帝におかせられては『乃木は別に使ふところがあるので裁可しなかつた』と仰せられ、その後幾許もなくして學習院長に御任命があつたと申すことであります、御承知の通り今上陛下には明治四十一年四月御學齡に達せられて學習院の初等科に御降學あらせられ、乃木將軍が學習院長に任命せられたのは其の前年でございますことを記憶せねばなりません。院長を仰せつかつた時將軍は、**身は老いぬよし疲るともすめらぎの、おほみめぐみに報いざらめや**

と述懐してをられます。それから老軀を捧げて皇孫殿下を始め奉り、諸皇族様方、華族達の子弟を薫陶することになった。

私は明治四十四年の二月に乃木將軍から同院の御用掛になつて貰ひたいとの相談を受けました、丁度その時分私の本職は軍令部の參謀でありましたが、私のやうな誠に貧弱な頭を持つてをりますものが、學習院御用掛を兼務するのはとても勸らないと思つたからお断りしました。すると今度は海軍大臣……この間亡くなられた齋藤子爵が海軍大臣で、さうして私を呼ばれ「あんなに乃木老將軍がいふのだから助けてやつたらいいぢやないか」「それでは少し考へさせて下さい」といつて直ぐ東郷元帥のところへ行つて相談した、「けふ海軍大臣からかういふ話があつたがどうでせうか」とすると元帥は「それは一寸考へ物だぞ、君の性質と乃木の性質とは大分違つてをる、だから今は君を御用掛として使はふと思つてをつても、君は隨分桁外れのことをやるから終に意見が合はなくなつて両方とも面白からぬやうになりでもすると困るぞ」と注意せられました。

私は元帥には二十臺の時から種々お世話になつて居つたから、元帥は私の缺點でも、短所で

も、道樂でも何から何までよく知悉してをられるが、乃木將軍とは日露戦争後まで殆ど縁がなかつた、それがどうしてその後懇意になつたかといふと面白いことがある、それは加藤清正公の三百年祭が縁になつた、御承知の通り乃木將軍は十年の戦争に小倉から熊本城に赴かんとし、西郷軍と戦はれた、さういふ關係から將軍のみでなく熊本城に關係ある人は皆清正公を崇拜してゐる、先月東京では中村吉右衛門といふ役者が熊本城の清正といふ劇をやつた、私も行つて見たが、熊本城といふ立派な城を清正が築いてをつたから西郷軍を喰止め得たのだ、熊本城は鹿兒島の方に向つて強く出来てをる、清正公の考へはさうして置いて徳川に眞心を示し、もつて間接に秀頼に好意を持つて貰ひたいといふことであつたに違ひない、それは兎も角鹿兒島に向つて強く出来てをつた事が一層西郷軍を喰止めるに力あつた。さういふ因縁があるから谷將軍にせよ樺山將軍にせよ兒玉將軍にせよ、奥將軍にせよ、すべて熊本籠城に關係のあつた將軍たちは皆清正公を崇拜してゐる、それで三百年祭の時に清正公のために御贈位をお願ひしまたお祭りをやつた。その時に東郷元帥が海軍の方からはお前が出て乃木將軍の相談相手になつてやれといふことで、私もその委員になつた、「乃木將軍の聲」のレコードが世の中に残つ

てをるのは其の際、私どもと一緒に偕行社で夕食を御馳走になる時に吹込んだものであります私としては此の祭典が縁になつて始めて乃木將軍と相識の間柄になつた。

それ位のことでありますから、東郷元帥は前述のやうに注意せられ、なほそれに續けて「乃木はお前のことはまだよく知つてをらぬ、お前は悪戯者である、時々軌道外れのことをやるから餘程考へないと後で乃木に愛憎をつかさされるよ、そこで御用掛をうける前に先づ乃木のところへ行つて自分の悪いところをすつかりいつて來い」これは尤もな話でありますから早速學習院へ行つて乃木將軍に會つて「私に御用掛になれといふお話で海軍大臣も頻りに勧めますから東郷元帥のところへ行つて相談しましたところ、元帥の言はれるには、閣下は私と大分性質が違ふから今はいゝと思つて御用掛にしてやつて見ると小笠原はあんな奴だとは思はなかつたと失望されるかも知れぬ、さうなつた時には閣下としても急にやめさすわけにも行かぬだらうしまた私としても不愉快な思ひをせねばならぬから、先づ私が閣下にお目にかゝつて私の性質をのこらすお話しして來いと申されました。でありますからこれから私の悪いところをすつかり申します」と云ひますと、乃木將軍は微笑せられたが、突然こんなことを言はれた「あなたのと

ころに會て大鳥といふ家令がゐたはずですな」と實に突飛な答へだが、私はそれで察した、私の一身上のことは悉く調べてよいも悪いも知つてゐるぞといふことをそれとなく知らせるための答へだ。そうまで知つてをられるのなら安心だから私も遂にお受けしました、さうして院内ばかりでなく、乃木將軍について一緒に所々へ見學に赴いたりしました、こんな旅行中にも随分面白い話もあつたが略します。

教育家の典型乃木將軍

さて將軍が生徒を教育する方法を協で見てもりますと、世間の取沙汰とは大分違ふ、世間では乃木將軍は學習院の生徒を悉く陸海軍人にするのを理想としてゐると考へてゐたやうでしたが、決してさうばかりではなかつた、或る時私と二人並んで院内の廣場を歩いてをると前方へ一人の學生が歩いてゆく、すると將軍は私に向はれ、「小笠原君あの男はあれは音楽をやらしたらきつと成功するよ」と言はれた、一寸聞くと不思議です、乃木は何でも彼でも陸海軍人になければ承知しないやうに私も最初は思つてゐたが決してさうばかりではない證據である、そ

の生徒は音楽が天才であると見抜くと直ぐそこへ持つて行く、實に將軍は個性といふものを無視されなかつた。

此の將軍の精神は實に教育家諸君が参考とせらるる必要があると思ふ。其の當時の學習院生徒中には今日大分政界で幅を利かしてゐる犬養健君、それから貴族院議員でこれまたなか／＼有力者となつて居られる酒井忠正伯など居たので、寄宿寮に於ては時々夜になると討論會が催される、これは將軍が許可してゐたので生徒が集つて代る／＼氣焔をあげる、犬養君にしろ酒井君にしろなか／＼よく喋べる、中には演壇に上ると平氣で院長の攻撃をやる者もある、さうして降りて來ると院長が直ぐ替つて壇に上つて「今誰某は院長たる自分の事をかういつたがあれは間違つてをる」と反駁して降りる、すると、また前の生徒が出て「院長のいつたことは間違つてをる」といふ風に生徒と院長が討論をやる、その間にいふにはれないあたゝかい味がある。また將軍のことを蔭で——この中にも學習院を出られた方がをられるか知りませぬが——よくラツキョ／＼といつてをりました、院長の頭の格好がラツキョに似てゐたといふのでラツキョ院長なんていつてゐた、しかしこんな憎まれ口をきゝながらも實によく將軍に服従して

をつた、おやぢ／＼といつて見たり、まるで子供が親父になつゝやうによくなつてゐたものであります。

花にも寄せる床しい慈愛

またこんな話もありました。冬のある日のことでありませんが、院長が軍事參議官會議に行つて大將の軍服を着けて歸つて來ると、中學のうちでも一番下の級の一生徒が凧を揚げてをつたそれは院長が許してゐたので、學課がすんで休憩時間に凧を揚げてをつたが、それが電柱に引つか／＼つた、それを見ると院長は「待て待て俺が取つてやらう」と大將の軍服に勳章をつけたまゝで竿を持つて來て凧を取らうとする、ところが戦さには強いが凧を取ることはあまり上手でなかつたと見えて幾らやつても取れない、そこへ高等科の方の生徒が來たそれを見た將軍は「おい待て、お前あの凧を取つてやれ」と命じたのでその學生は仕方がないからその竿を持つて凧を取つてやつたといふ話がある。

また或る夏のこと……夏になると學生は大抵鎌倉に行つて天幕を張つて乃木將軍もその中

で暮す、或る時天幕の中から見ると初等科の生徒の一人がその邊に咲いてゐた撫子花を手折り、それを千切つては捨て千切つては捨てゝをつた、それを見ると乃木院長はその生徒を呼んで、

かういふ花もこれは天の時を得て咲くものであるから、これを取つて瓶なり何なりに生けて楽しむのならよいが、みだりに取つて花を千切るといふやうな、無慈悲なことをしてはいけない。さういふことをしてゐるとその無慈悲な心がだん／＼ひどくなり終には慘酷な人間になり、他人に對しても慈悲を忘れるといふことにならぬとも限らないから、花一つと雖も大切にしろよ、

といつて諭されたことがあります。

この草花について東郷元帥にも同じやうな面白い話がある、同元帥が東宮殿下の御學問所總裁を承つてゐた際、春季……一月より四月頃までは毎年沼津の御用邸に成らせられ、そこで御修學あらせられることになつてゐた、その際には東郷元帥も私もお供をしてそこへ參るので、或る時その御學問所を退出して旅宿の三島館へ戻らうと、一緒に途中の松原を通りかゝる

と路の傍に螢草が千切られて捨てられてあつた、螢草といふつまらぬ草花なのである、恐らくそれを漁師の子供か何かで千切り捨てたのでありませう。東郷元帥はそれをちつと見てをつたが、やがてその螢草を拾つてポケットの中へ入れられた、「面白いことをするなア」と私は見つけた、ところが旅宿へ戻り自分の部屋へ入るとすぐに床の間に行つてポケットから螢草を出しそこにある花生けの中に挿された、私はそれを見ながら隣室の自分の部屋へ歸つた、夕飯はいつも元帥の部屋と一緒に食べることになつてゐるので、その時間に再び元帥の部屋にゆくと、さつきの螢草は水を揚げてピンとなつてをる、元帥は私を振返つて「どうだ小笠原君さつきの螢草が生き返つたよ」と如何にも満足氣にそれを見て居られる時には私は何となく頭が下つた、かういふ風に草花の如きに對しても兩將軍の情は斯様に深いので、私は一種の感激を覚えざるを得なかつたのである。

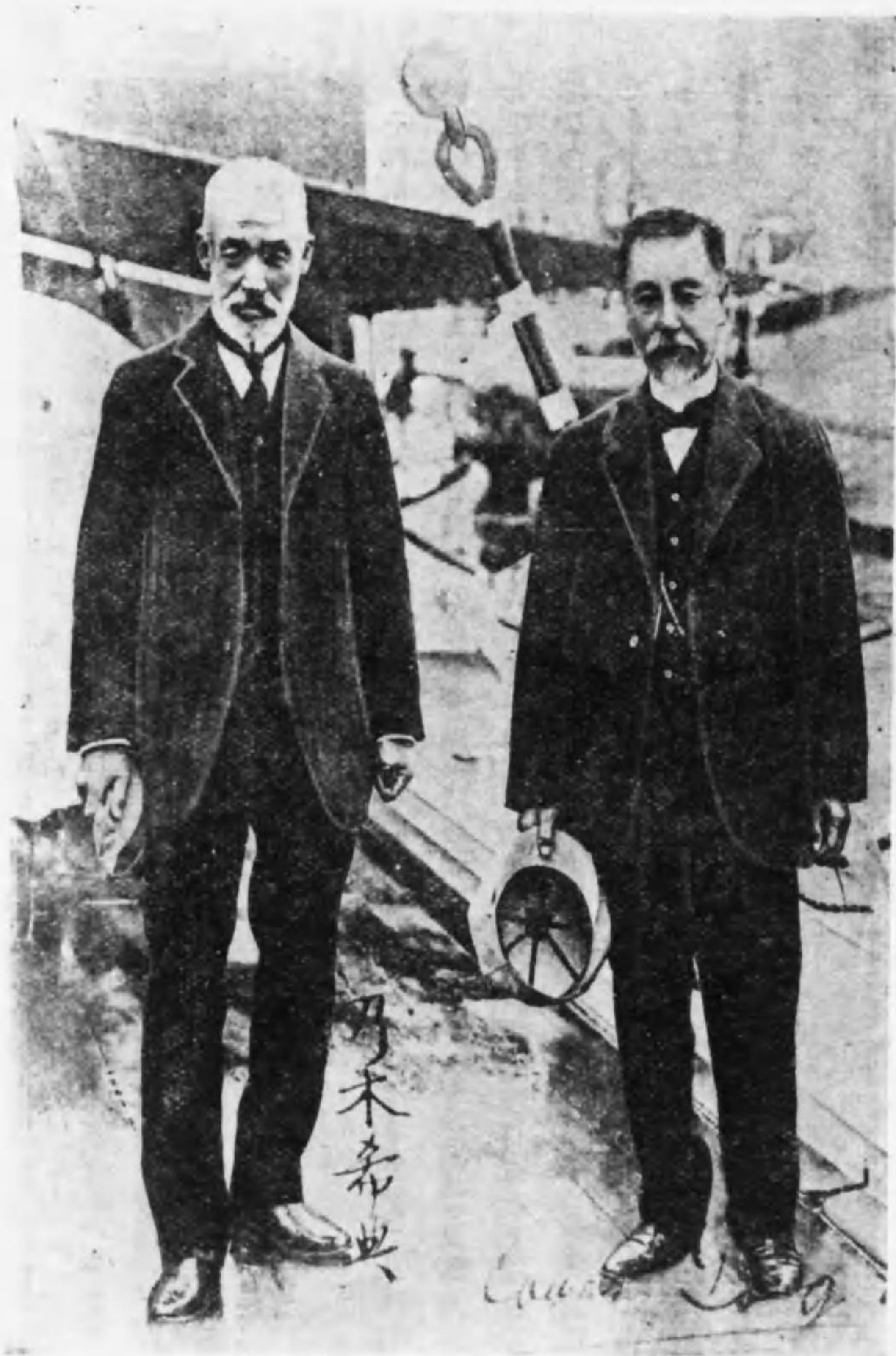
話が少々前後しますが、乃木將軍が學習院長に就任される頃でありました、東郷元帥と相談せられ旅順に高さ二百十八尺の表忠塔を造つた、それは旅順の攻略に際し討死した二萬二千七百十九名の英靈を慰め其の功績を後世に傳へるために造られたのである。さうして塔の壁面に

ある塔記は兩將軍が協議して作つたもので、一讀人をして當時の激戦を想はしめ、皇軍將兵の如何に忠勇なるかを偲ばしめるのであります。

梨花音なくして散る春の夕暮、胡笛月に咽ぶ秋の夜など、此の塔を仰ぎ見る多感の遊子は、涙なしにはをられないであります。

笑はぬ乃木、沈黙の東郷

それから後に兩將軍の行動を共にされたのは明治四十四年に於ける英國皇帝の戴冠式の際でありました、この時兩將軍は東伏見宮依仁親王殿下のお供をして渡英したのであります。此の一事だけでも詳細にお話すると興味深いものがありますが、長くなりますからやめまして、二のことを述べますと、渡英の船中で兩將軍はいつでも碁を打つてをつた。それに關し外國の新聞記者がいろいろなことを書いてをるし私も承知してをるが、東郷元帥の碁の程度はあまり大したものではない、どつちかといへば笨碁……甚だ失禮ではあるがまア笨碁の域を餘り離れてはをられない。乃木將軍もあまり強くないから、二人は互に好敵手であつた、しかし將軍



英帝戴冠式に參列の上途の兩將軍

も稀には甲板にも出られるが、乃木將軍は笑ひ顔を見せたことが殆んどない、そこでもの好きな外國人等は何とかして將軍の笑ひ顔を見ようと思つて將軍のあとをつけ廻してをると、或る時將軍が他の船客とデッキゴルフをやつた、さうして突き損つた時に始めて乃木將軍が「あッしまつた」といつて笑つたさうだ、これを見た外國の新聞記者たちはまるで鬼の首でも取つたやう各々その本社に報告してをるから面白い。

それから東郷元帥ですが、これはまた乃木將軍に輪をかけたダンマリ屋で、世界的に無口といふ評判の人であります。先刻この席へおいでになつた松崎少將閣下は嘗て東郷元帥の副官をしてをられたからその邊のことはよく御承知であります、世界的無口家といはれるが通り名になつてゐる東郷元帥も、ある場合——例へば我々に訓戒でもせられるやうな場合には一變して非常なる雄辯家になられる、併しこれは樂屋裏のことでありまして、表面はどこまでも黙々としてをられる、よくもあゝ無口でをられると感心したことがある、それは東郷元帥が軍令部長をしてをられた時に私はその下に參謀をしてをつたが、恰度英國の東洋艦隊が揃つて横濱に入つた、その時軍令部長として東郷元帥が三井クラブで英國の艦隊司令長官以下に御馳走をし

た、メインテーブルの眞中に主人役の東郷元帥がゐて、これに對して英國の司令長官、元帥の右方に參謀長が居りその他の將校が居並んでゐた、私どもそのテーブルの端の方から見てゐると、英國の長官などが頻りと話しかけるが元帥はそれに對してイエスカノーかをいふだけで其の他は黙々として一言でも、お愛想をいふのぢやなく頻りにホークやナイフを動かして勝手に料理を喰べるばかりです。その辯東郷元帥は明治四年から十年まで六年間英國に留學してをつたのであるから、英語も薩摩辯で訛りはあるが、自由に話すことも出来るし聞く耳も持つてをる、それにも拘らずイエスカノーよりは減多に言はれなかつた、それ程に無口の人であります。

兩將軍の性格のちがひ

この二人が共に英國へ行つて戴冠式が終ると乃木將軍は別れてバルカン半島の方へ行つた、この時に兩將軍の性格がよく判る斯ういふ話がある、乃木將軍は「ロシアへ行つてステツセルを訪問し慰藉してやらう、昔の敵であるが今日では親しい友達であるから行つて慰めてやら

う」といつた、すると東郷元帥はこれに同意を表さなかつた、「あなたは日本の武士道から割りだして態々行つて慰めてやらうと思はれるのであらうが、ロシアの人情は日本武士道とは違つてゐるからあなたが行つたら、反つて恥をかゝせに來たと思ふだらう、切角のあなたの好意を無駄にするのみならずどんなことをあなたに對して仕出かすかもわからぬからおやめになつた方がいゝだらうと」忠告した、ところが乃木將軍は何でも行くといつて承知されなかつた。ところが駐露大使の注意によつて結局乃木將軍はロシア行きを断念せねばならなくなり、轉じてバルカン諸國を廻られた。

その際ルーマニヤに行つたところがルーマニヤの王は、將軍を敬慕のあまり外國の王族を迎へる禮をもつて將軍を迎へた。さうしてその同國滞在中、或る時ルーマニヤの皇后……この方は大層風流なお方であつたから、或る晚餐の時にそれに關する種々なお話を乃木將軍にせられた。將軍が「日本には楓もみぢといふ樹が御座いまして、これが秋になると紅葉して春の花より綺麗であります」と申上げた、それを聴かれると皇后は微笑せられて、「何とかして楓を見たいものだ」と仰せられた、それを乃木將軍はちやんと覺えてをいつて歸朝の後、楓のよく色づいた

枝を箱に入れて態々ルーマニヤの皇后に献上したといふ風流談が残つてをります。

多涙多恨な乃木將軍

かういふ話は一寸聞くと性格から見て甚だ異様に思はれるがさうではない。乃木將軍といふ人は實に多涙多感な方で、淺く觀ると二人の子供を犠牲に供してそれでもつて申譯をする、成るほど自分の申譯にはなるか知らぬが、父子の愛情については冷酷だと評した人もあるが、私はそれについて泣かされたことがある。

或る時私が乃木將軍の家を訪ねると、將軍は少尉の軍服を着てをられた、浪花節や講談では時々乃木將軍が羽織袴で歩いてをられたといふやうなことをいふが、私の知る限りでは乃木將軍は中耳炎で赤十字病院に入つた時より外に軍服以外の着物を着てゐるのを見たことがない。尤も英國に往かれる準備の際には已むを得ずテールコートなんか作られたがその時に「小笠原さんまるで嫁にゆくやうだよ」と苦笑せられた、その位いつも大將の軍服を着てをられるそれが少尉の服を着てをられた、肩章さへ取替へればすむのになぜ少尉の肩章のまゝで着てをられ

るのだらう。そこで私は「けふは妙な服をおつけになつてをられますね」といひますと「これは次男が旅順の戦に参つてゐた時妻が送つてやつたのだが届かないうちに次男は戦死したので新らしい服だから着てゐるよ」それならば肩章位替へられさうなもので、あの厳格な將軍の事だから本来なら少尉の肩章のついた服をそのまゝ着られる筈がない、これはせめてもの心やりにもそのまゝ着てをられるのだなと思ふと涙が出てまゐりました、さうして私は乃木といふ人は多涙多恨の人であるとしみじく思つた、それだけ情の深い人であるから二人の子供を失つた時にはどんな心で泣かれたかわからぬ、しかしながら第三軍司令官の乃木としては一滴の涙も見せなかつた、それが今少尉のまゝの服を着て當時を偲ばれてをるのかと思ふと涙をとめることが出来ませんでした。斯様に乃木將軍は多涙多恨の人であつたのだ。

東宮御學問所總裁を決意

乃木將軍が英國から歸つて來た直後、或る日私に向ひ、ゆつくり話したい事があるが、學習院でも海軍省でも一寸具合が悪いにより華族會館で話がしたいから暇を作つてくれといふこと

で、私は都合して参りました。さうすると將軍は容を正し畏れながらその時分は今上陛下がまだ皇孫殿下であらせられたのでありますが、初等科を御卒業遊ばされたなら、それからは學習院で御修學あらせられることはおよろしくない、御所内に御學問所を御設置になつてそこでいはゆる帝王學をお修めになるのがよろしいと考へる、と先づ申されたが、乃木將軍の口吻から推すと、どうも御學問所總裁には東郷元帥を推してをられたやうに思はれる、その時將軍は御學問所に關する意見書を私にも示されて愚見を徵せられたので、私も忌憚なく思ふところを申しますと、將軍は首肯せられて「それでは直ぐこゝで直さう」といはれて朱でそれを書き直された、その草稿は今私の家寶として大切に保存してをり、乃木將軍は東郷元帥以外に御學問所總裁はなしと考へてをられたやうであります、この事は嘗て宮内省でもお話しいたしましたしまた杉浦重剛翁の門弟の人達の集會に於ても述べた所であります。

然るに皇孫殿下の初等科御修了に先だち、乃木將軍は御承知の通り明治大帝の御あとを慕つて薨去せられ、今上陛下は東宮にお立ち遊ばされた、御十四歳でもつて大正三年三月に學習院初等科を御修了遊ばされ、續いて同年四月から乃木將軍の意見通り東宮御所内に御學問所が新

に御設置になりました、さうして長い御説の下に東郷元帥がその總裁を拜承せねばならないやうになつたのであります。この時元帥が詠まれた述懐の歌は

おろかなる心につくす誠をば みそなはしてよ天つちの神

といふのであります、その覺悟の程もうかゞはれるので御座います、その時の東郷元帥の決心……それを見て夫人も一首の和歌を詠ぜられた

いと重き御役務むるその人を 護らせたまへ紫尾の明神

この紫尾の明神といひますのは東郷家にとつては大切な守護神であります、その縁起をたづねると、むかし澁谷庄司重國の孫が鎌倉から薩摩の東郷に封ぜられて來た際に其處に以前より大前氏といふ豪族がゐて大にこれと争つた。しかし對手が頗る優勢で數代に亘つても之を征服し得なかつたので、東郷家の第三世重親といふ人が非常に憤慨して、終に惡鬼となつて彼を亡すと誓ひ、緋緘の鎧を着て白馬に跨つて洞穴に躍り入つて再び出て來ない、そのためかどうか判りませんが、その後大前氏は滅んで東郷氏がその邊一帯を領することになつたので、爾後この重親を紫尾大明神と祀り、東郷家の守護神と崇めてをります、夫人の歌にある紫尾の明神とい

ふのはこれなのであります。實にこの飾らざる一首の歌によつて見ても如何に元帥夫人が良人の身を心配してられたかがわかる。それほどまでに元帥は命をかけて御奉公をしようと思はれたのであります。

野人杉浦翁起用さる

さてそこで元帥は御學問所御用掛としていろんな學者を選び歴史、地理、理學、化學等の權威者を集めたが、一科目の御用掛に適任者を見出し得ないのがあつた。それは即ち帝王學の中核をなす倫理の進講者でありました。そこで大正三年四月から御學問所は御開始になつたが此の倫理の進講者たる御用掛が定らなかつたので、五月末まで倫理の一科目は御進講申さなかつた、そこで山川健次郎博士が杉浦重剛といふ人をお任命になつたらどうかと元帥に進言した。その時私は御學問所の幹事を仰せつかつて居りましたが、私も杉浦といふ人を精しくは知らなかつた、たゞ人傳に國士であるといふこと、そして大體の人格について承つてをつたのであります、たゞいはゆる「志士」といふやうな人の葬式の際に知人からあの人杉浦といふ學者的

國士だよと教へられたことがある。羊羹色の羽織を着て古ぼけた山高帽を被つて、まあ一寸評しますと新派のやる金色夜叉の芝居に出て来る荒尾讓介を年を取らせたと云つたやうな風采の人でありました。

さて杉浦氏が候補者になつた際、東郷元帥は私にかう聞いた「小笠原君、君は杉浦といふ人をよく知つてをるか」「私はあまりよく存じませぬ」「どんな人だね」「私はよくは存じませぬが信すべき友人から聞くところによりますと杉浦といふ人は命がけで事をする人だといふことであります」すると元帥は強く頷かれて「さうか、それでよろしい」そう申されて直ぐ杉浦氏と決定せられたのであります。實に元帥は人を見る明といふものが最も勝れてゐて、それが元帥の特色の一つでもあります。何といつても當時杉浦といふ人は日本中學の校長ではあつたが言はゞ浪人の一頭目に過ぎなかつた、さういふ人を拔擢して東宮殿下の倫理の進講者にした、随分思ひ切つたやり方で東郷元帥にして初めて爲し得られることであります。

東郷、杉浦の意氣投合

ところでこの杉浦といふ人が乃木將軍とは意氣投合してをつた、なかなか面白い話がある、乃木將軍が學習院長になられた際杉浦氏が松の芽生を贈つた、その松は近江の唐崎の松の實生で、それを贈つた。思ふに乃木將軍の爲人を松に譬へたのでありませう、それを將軍も喜んで受付學習院内の明治天皇様が行幸遊ばされた時、御座所に置いた櫛……それを植えたその横のところへ自分で「唐崎の松、杉浦重剛氏より贈らる」と棒杭へ書いて植えられた、乃木將軍が薨去の後遺品など整理をする時にこの將軍の書いた棒杭を杉浦氏に贈つたといふゆかしい逸話が遺つてをる。斯様に乃木將軍と杉浦氏とは非常に意氣投合してをつた。その杉浦氏を東郷元帥が拔擢したのも考へると因縁の致すところ妙なりといふべしです。

ところで杉浦氏の御進講ぶり……それは實に驚くばかりの用意と研究の上に組立てられたもので、最近その材料が杉浦氏の門下生によりて出版することになりましたから、謹讀せられたなら判りますが、實に驚ろく程大分なものである。私は事情ありて杉浦氏が亡くなられてから後にその材料を被見した事がありますが、其の博學と見識に驚いたのであります。

それから杉浦氏の御進講の仕方といふものはこれはまた至れり盡せりのもので、先づその用

意を申しますと御進講と申す朝は午前の二時ごろから起き、すつかり齋戒沐浴して身を淨め、冥想して明け方まで待つてを待つて、御進講の始まる二時間前に参殿してゐる、私は幹事でありましたから他の人より早く参殿する、ところがたゞの一遍も杉浦氏より先へ参殿したことがなかつた、いつ参殿しても入口のところにはちゃんと杉浦氏の山高帽子が掛つてをる、午前六時頃に参殿しても矢張りちゃんと山高帽子が掛つてをる、これにはすくなくからず驚かされたので、杉浦氏に向ひ「あなたは一體何時頃参殿せられるのですか」と訊くと「私は御定刻より二時間半から三時間位早く参殿します、途中でもし車夫に間違ひ等があつても徒歩しても御定刻前に参殿し得るやうにしてをる」……なる程小石川から歩いて來てもお間に合ふやうにするにはさうしなければなるまい、この一事を見ても杉浦氏の献身的の御奉公ぶりがわかる、さうしていよくこれを御進講申上げるといふ草稿が出来るとそれを持つて靖國神社等へ参拜し祈願を込めたものだ、御學問所が御開始になつた時にはまだ明治神宮は御出來になつてをらぬ、それだから靖國神社、松陰神社、或は自己の親友の墓へまで参つて胸中を報告したりして、然る後に御進講申上げるのを常としてゐた、さうして御進講申し上ぐる内容は廣く社會全般の事にわたつ

てをる、御進講は一週間に二度で、そのうち一度は當然帝王學としての倫理を申上げる、その一はあらゆる問題を拉し來つて御進講申し上げる、例へば學術以外の月でも雪でも花でも大自然に即した事から、人爲的の相撲でも競馬でも何でも彼でも有りとも有ゆるものを題として申上げ、終りにはそれを日本固有の道義に照し結論を謹述するやうにしてをられた。

杉浦翁の御進講ぶり

ところで杉浦といふ人は時にはいゝ意味で脱線することがあつた、或る時「功成り名遂げて身退く」といふ題で御進講を申し上げた際、人間といふものは出所進退を明らかにすることが大切であります、これを誤ると如何に偉い人でも憐れな末路を取る場合があるので、されば功成り名遂げて身を退くことは最も心すべきものであるとだん／＼申上げてゐるうちに、これについてかういふ謡曲がありますからといつて、フロックを著た孔子様のやうな格恰をして斜めに脇を向くと、

功なり名とげて身退くは天の道と心得て

といふ謡曲「船辨慶」の一節を朗々と謡ひ出した、この時には陪聴してゐた東郷元帥も濱尾、山川両男爵も吃驚してをられた、私も全くハラ／＼してをつたが、御當人は一向平氣でをられるがあまりうまくはなかつた。我々でも一寸眞似たら出来さうな程度でありました。しかし杉浦氏は觀世、梅若何者ぞといふ顔をして悠々と謡ひ終つたのであります。

また或る時は易の講釋を申上げ、易といふものについて頻りに御説明申上げてゐるうちに、側らに置いた包みを解き初めた、さうして算木算竹を取り出してガチャ／＼とやり初めた、どうするかと見てゐると、こゝが大事なところですよ——かういふ風に無念無想の境に立つてと、一呼吸して算竹をガチャ／＼やりぢつと目をつむつてサツと二分する、さうしては算木を並べる、殿下に於かせられては初めて御覽になつたので不思議に思召されたやうに拜しました。

また或る時赤穂義士について御進講申上げた、杉浦氏は非常に義士が好きで、尤も義士の嫌ひな人はまア少いだらうが、赤穂義士は日本魂の権化であるといつて、杉浦氏はそれについていろ／＼調べてをります。そこで御進講中「空で四十七士の名を書いて御覽に入れます」といつて大石内藏之助からずつと義士の名前を書き出した、四十七士のうち二十四、五人まではす

ら／＼書いたがそれから先は一寸つかえ初めた、さすがに記憶を辿つて漸く四十七名を書きは書いたが、終つた時に御時間が来てしまつたといふ話もある。御學問所が終られて後、或る時殿下に於かせられては沼津に成らせられた際東郷元帥と杉浦氏と私とに「沼津に参れ」といふ御沙汰があつた、杉浦氏は折悪しく風邪で臥床してゐたので東郷元帥と私が沼津に伺候した、さうして夕御飯を賜つた、その御飯も特別のお誂へではなく殿下の召上るものを賜つた御内々の御陪食で、御食事後十時ごろまでいろ／＼お物語りがあり元帥も種々申上げましたが、その時殿下には「杉浦がいつか義士の名を書いたことがあるなア」と仰せられました、東郷元帥は「左様でございました、二十五名位まではすらく／＼と書かれたがそれから先は杉浦も聞へて、やつと書上げた時には御時間が参りました」と御答へ申し上げ、歸京した上そのことを杉浦氏に話しましたところそれ程御記憶に留めさせられて下さるか、涙をこぼして喜んでゐたのであります、何にしても杉浦氏の御進講は活々としたもので私は他にこれ程の講義を聴いたことはありません。

さていよいよ御學問所が御閉鎖になるといふ時に、殿下に於かせられては東郷元帥以下御學

問所職員一同を御前にお召し遊ばされて有り難い御沙汰を賜りました。その中に深く謝すといふ畏れ多いお言葉がありましたので、元帥や杉浦氏は感激の涙に咽んだのであります、斯くして御學問所は御閉鎖になり私は東郷元帥と杉浦氏と二人のお宅を直ぐ訪問した、その際東郷元帥に賜物があるから参内せよといふ御沙汰がありました、元帥は公務上の差支へがあつたので私が代理として参内致しました、元帥はその時明治神宮に大切な御用が滞りなく勤まつたお禮に参拜したのであります。

あ、東郷元帥夫人

さて私が参内致しますと、御紋散らし太刀造りの太刀を賜つた、この太刀は三條吉則といふ名工の鍊へたもので、漏れ承る所によりますと、日露戦争の際明治大帝に於かせられてはこれをお拵へになつて一番功のあつたものに遣すといふ聖意であらせられた。併し、陸の大山、海の東郷は其の功に優劣なしといふので遂にそのまゝ御手許にお留置きになつたものださうであります。

それを賜つた私は代理として拜受し、さうして東郷家へ戻つて來、元帥にお渡ししようと思つたが、元帥は明治神宮へお参りをしてまだ不在だったので「奥様あなたにお渡しします」と申しますと、夫人はどうしても受けられない「これは私が手を觸れるべきものでございませぬ」と固辭するので、一體東郷元帥の夫人はまことに朗らかな人で、一寸見るとガラ／＼してをるやうだが決してさうではなく、元帥が御學問所總裁として奉仕してをられた際も夫人は献身的に内助にとめられたので、言はゞ夫人が東郷といふ聖將の半分をつくり上げたやうなものであります。前にも述べた通り杉浦氏が御進講申上げる日には夜中の二時ごろから起きたのであるが、東郷元帥は毎晩二時ごろまで起きてをられて、多數の御用掛から提出する特撰の御教科に目を通される、それは勿論濱尾、山川両氏が下調べはするが、結局は元帥が是非を定めるのであるから、それで毎晩二時ごろまでかゝる、私もそれまで元帥のところへ行つてゐて脇で援助もすれば質問にも應ずる。夫人は女中を皆寝かして自分だけ次の間に控へて疊觸りまでそつとして、時々黙つてお茶を持つて來る、お菓子を持つて來る、果物を持つて來る、さうして自分は次の間に控へてをる、二時頃になつてけふはこれでやめるとなると、夫人は私を態々玄

關まで送つてくれて、私の下駄まで直してくれて、自分のために骨を折つてくれたやうに「御苦勞様でした」といはれる、さういふ心がけの夫人でありますから、賜はつた太刀をどうしても受取らない、さうして言はれるには「時々主人は刀の手入れをしますが、刀といふものは婦女子の手を觸るべきものでない、といはれて自身でされるので、ましてかういふ貴いものに手を觸れることは私としては決して出来ませぬ、あなたがこゝへお掛け下さい」といつて刀架を持つて來られた、さうして私がその太刀をかけると夫人は一聞下つて両手をついてお辭儀をせられた、私も頭が下つてしまひました。

その翌日は私は改めてまた元帥邸に参りまして「七年間の長いあひだ自分のやうな不束かなものが大過なく御奉公出來ましたことは皆閣下の指導によるものであります」とお禮を述べました、その時元帥は羽織袴で、丁寧に挨拶せられ「妻も御挨拶したいといつてをる」といはれ夫人も紋付で「長い間東郷をよくお助け下さいました有り難うございます」と禮をいはれた、この時私はこの夫人があつて、本當に聖將東郷といふものが出來上つたのだなアとかう思つた。

杉浦翁と東郷元帥の議論

それから杉浦氏のところへ行つた、杉浦氏は病氣で寝てをる、一體杉浦といふ人は非常に蒲柳の質で實に弱い、初めて御用掛になる時に私は心配した、冬になると殿下は沼津にお出でになる、東京から沼津まで往復する、殊に杉浦氏は日本中學の校長をしてをられたので行つたり來たりする、一週間に二度ですが、殆ど毎日行つたり來たりしなければならぬ、非常に弱い人ですがと東郷元帥にいつたところが元帥は「何、小笠原君、杉浦といふ人はあれは氣で生きてゐるのだから、氣さへ腐らなければ病氣はせんよ」といはれたが、七年間の御奉公中殆ど病氣をしなかつた、その代り私も脇から氣を腐らさないやうに成るだけ杉浦氏の意見が通るやうに始終氣をつけてゐました、また元帥もよくされたもので、時々いろ／＼の事件を起しました、元帥は終始杉浦氏を授けられた。

或る時杉浦氏がかういふ歌を詠んだことがある、

天が下野分山分あるくとも　ゆるがぬ御代となさでやむべき

實にこの歌を讀んでをると恐ろしくなるほど杉浦氏の面影が髣髴として出て來るのであります。さういふしつかりした人であります。時々元帥と冗談をいつたり、一緒に食事をしながら面白い話をしかけたりした。或る時沼津で杉浦氏が御學問所の御用がすんで、恰度今頃の氣候でした。桃の花が一帶に咲いてをつたが、二人の偉人が「どうだい、これから歩きながら三島館まで歸らうぢやないか」といつて松林中を歩いて三島館まで歸られた、私も後からついて歸りましたが、一方は日本海々戦の大勇將、一方は條約改正に活躍した人で、傍らから見てみると如何にも慷慨談でもしてをるやうに見えるのであるが、實はお菓子の話をしてをつたのだ、一番初めに東郷元帥が「時に杉浦さんパイといふものはうまいものだよ」杉浦氏が「さうですかア、パイよりも私どもは藤村の羊羹を玉露でやつた方がいゝ」さうかなア、ぢやがパイがうまく出来ればなか／＼好いものぢや、あれがよく出来れば一人前のコックだよ」東郷元帥は實に詳しいパイの講釋をしてゐる「これをかうしてかうやつて……」杉浦氏は頻りに感心して聞いてゐたが「そのパイもうまからうが藤村の羊羹の方がうまい」この議論が始つてとう／＼三島館まで議論が盡きなかつた、二人の仲はこんなであつたのだ。

杉浦翁、臨終の光景

さて私は東郷家より、杉浦氏のところを訪ねると病氣をしてをる、そこで私は「曾て東郷元帥があなたのことを、氣で生きてをるから氣さへ腐らさなければ大丈夫だよといはれましたが七年間殆ど御病氣をせず、御用が終つたからとはいへあまり現金ですね」と申しました、杉浦氏は「小笠原さん、かういふ大切な御用を滞りなくすまして私は何といつていゝか天地に對してお禮を申さなければならぬ、實は杉浦など御指導申上げたなど以つての外で杉浦が始終試験をせられたやうな考へを持つてをりました、自分は何萬といふ青年を取扱つたが畏れながら殿下のやうに聰明なお方様に會つて會ふたことがない、斯様に畏れながらお立派であらせられるので、杉浦もどうやら試験に及第したやうな氣がします」と云ふて御所の方へ拜伏した。

杉浦氏が御用掛を拜命した時にかういふ歌を詠んでゐる、

數ならぬ身にしあれども今日よりは 我身にあらぬ我身とぞおもふ

その位に熱心に御奉公申上げたのである、更に杉浦氏は「小笠原さんこの手を見て下さい」と

手を出した、その手を私が握つて見ますと、私のこの中指をかうやつて優に廻る位に瘦せてゐる、骨と皮ばかりになつてゐた、私は手を握つた時に感懐無量で放すことが出来なかつた、さうすると杉浦氏も私の顔をじつと見てゐましたが、ホロリと涙をこぼした、斯うして別れたがそれから後すつと病氣をしてをりました、畏多いことながら殿下が御成婚をすませられてから僅に十數日経つて亡くなつた、さうしていよ／＼息を引取る三十分ばかり前、大きな聲を出して、

無理に渡れば紅葉が散るし 渡らにや聞えぬ鹿の聲

といふ佐渡節を唄つた、これを今日の時勢に合して見て實に成る程これは味ふべき意味の諷であると思ふのであります。さうしてそれからもういよ／＼臨終といふ時に息子さんが「何かお言ひ残しになることがありますか」と尋ねますと

『たゞ國家の前途を憂ふるのみ』

これが遺言であります。乃木將軍の明治大帝の御後を慕ひ奉つたことは御承知のことではありますが、東郷元帥のなくなられる時には「忠孝」二つの手本を我々に示して訓された、杉浦氏の

最後の言葉は「たゞ國の前途を憂ふるのみ」であります。

今にして三偉人あらば

どうぞ皆様方も私ども共にこの杉浦氏が最後に残した「たゞ國家の前途を憂ふるのみ」といふ、この心を常に持つて行きたいものであります。これをかなめとして出来上つたものが本當の舉國一致でありませう。昨今のやうな時勢に對し私どもは益々この三偉人を思ふことが切なのであります、もし今日この三偉人のやうな人が存命してをつたならばどうでせう。定めし今よりもつともつと世の中がよくなつたことだらうと思ふのであります、何かにつけて偲ばれるのはかういふ人達の忠節であります。兎も角この三偉人が今上陛下の御教育の上にこれほどの精神を捧げ奉つて御奉公を申上げたといふことは、我々臣民の一人としてこの三偉人に對して深く／＼感謝しなければならぬところだと思ふのであります。(完)

純國産

16ミリの驚異

アローの

撮影機と映寫機



アロー撮影機

ダルメヤーF1.8付

三段スピード付 275圓

アロー映寫機

F型 195圓

A型 250圓

S型(直射式) 295圓

最寄寫眞機材料店で
カタログを
御請求下さい



フォツトニュース社

私書函神戸中央局820番

昭和十一年五月二十日印刷
昭和十一年六月一日發行

編輯兼發行者

小林 忠次郎

印刷所

株式會社 神戸印刷所
大阪府北區會根崎上四丁目
神戸市東區相生町三丁目五六

發行所

大阪府北區會根崎上四丁目
大阪時事新報社

電話代表番號九九五番
振替口座大阪二三一九番

〔定價貳拾錢〕

終

